

国語 第1学年 ひらがなをつかおう（1～2）

授業の設計図

元にした物：小学校学習指導要領（平成29年告示）の原文と、国立教育政策研究所の学習評価の参考資料。教科書の本文・問題・挿絵は入れていません（先生が入れる欄）。東京書籍「新編 新しい国語（令和6年度版）」の単元一覧にある3月の学習。教材名と配当は公式資料を基にした。教科書の本文・台詞・挿絵・固有の問題は転載していない。

この単元で子どもが最後にできるようになること

促音・拗音・助詞などの表記の読み返しを、用語の暗記だけで終えず、自分が言葉を使う場面へ移す。授業の中心は「口で言った言葉と、書いた言葉は同じ発音になりますか」である。児童の結論だけを集めると、元から知っていたのか、授業で検討して考え直したのかが見えない。初めの答えと読み返しの印と書き直した生活文を照らし、判断の根拠がどう変わったかを確認する。

学習指導要領のどこに書いてあるか（原文）

学習指導要領の項目	原文
〔第1学年及び第2学年〕〔知識及び技能〕(1)ウ	ウ 長音，拗《よう》音，促音，撥《はつ》音などの表記，助詞の「は」，「へ」及び「を」の使い方，句読点の打ち方，かぎ（「」）の使い方を理解して文や文章の中で使うこと。また，平仮名及び片仮名を読み，書くとともに，片仮名で書く語の種類を知り，文や文章の中で使うこと。
〔第1学年及び第2学年〕B 書くこと(1)エ	エ 文章を読み返す習慣を付けるとともに，間違いを正したり，語と語や文と文との続き方を確かめたりすること。

単元の目標

促音・拗音・助詞などの表記の読み返しを捉え、言葉を使う場面で役立てる。読み返しの印と書き直した生活文に自分の判断と理由を表す。友達の応答や自分の記録を基に、言葉の捉え方や表し方を見直そうとする。

評価規準（3観点）

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
①促音・拗音・助詞などの表記の読み返しを理解し、学習で扱った語句や例を示して説明している。（〔知識及び技能〕(1)ウ）	①「書くこと」において、自分の生活文を声に出して読み、小さい文字や助詞を確かめて書き見直している。（B(1)エ）	①見通しをもって言葉や表現を検討し、交流で気付いた点を基に、自分の読み方や表し方を見直そうとしている。

単元の流れ

総時数は東京書籍の公式単元一覧による。以下の活動の配分と本時の位置は、本案で提案する授業計画である。複数回の練習をまとめた項目で、連続して実施するのではなく、該当する教材を学んだ時期に分けて扱う。

次	時	学習活動	評価規準（評価方法）
各回の学習	1 （本時）	○その回に扱った表記を、学校で起きた出来事を書く文の中で使う。 ○口で言った言葉と、書いた言葉は同じ発音になりますかを観点に、読み手が意味を取り違えないかを見直し、訂正した箇所を記録する。	知①（表記と語の意味）・思①（文章の見直し）
	2	○その回に扱った表記を、学習で観察した物を書く文の中で使う。 ○口で言った言葉と、書いた言葉は同じ発音になりますかを観点に、読み手が意味を取り違えないかを見直し、訂正した箇所を記録する。	知①（表記と語の意味）・思①（文章の見直し）



本時の案

本時の目標：促音・拗音・助詞などの表記の読み返しについて、例や資料を根拠にした自分の考えを読み返しの印と書き直した生活文へ表すことができる。

段階	学習活動（○主な発問） ・予想される児童の反応	指導上の留意点（◎評価）
導入 （ 分）	1 身近な経験と既習の言葉を確認、今日使う教材や資料を準備する。 ○「口で言った言葉と、書いた言葉は同じ発音になりますか」 【めあて】促音・拗音・助詞などの表記の読み返しについて、自分の考えと理由を表そう。 〈予想される児童の反応〉 ・「へ」は行く先を表しているの、音だけで字を決めない。 ・初めの見方では決められない箇所もあり、例を比べてみたい。	本時に使う具体例が見える所へ置く。聞こえる音だけで助詞や小さい文字を書く姿が見られても、すぐに訂正せず、どの言葉や経験からそう判断したかを聞き取る。
展開 （ 分）	2 自分の生活文を声に出して読み、小さい文字や助詞を確認めて書き直す。 3 読み返しの印と書き直した生活文の下書きや途中の記録を示し、考えた理由を説明する。 ○「口で言った言葉と、書いた言葉は同じ発音になりますか」 4 聞き手は、説明に使われた語句や資料を示して質問する。答えが異なる所は、意味や条件を調べてもう一度表す。 〈予想される児童の反応〉 ・「へ」は行く先を表しているの、音だけで字を決めない。 ・最初はそう考えたが、別の例と比べると直したいところが見つかった。	音を区切る手拍子と文の中での役割の確認を分け、助詞は文で読み比べる。説明が難しい児童には、対象の語句を選ぶ、線や矢印で関係を示す、口で説明するという方法も用意する。書く量を減らす場合も、本時に考える言葉の関係は残す。早くできた児童には、同じ説明が通らない場合や、他の言い方の可能性を考えさせる。 ◎思① 自分の生活文を声に出して読み、小さい文字や助詞を確認めて書き見直している。（途中の記録・説明）
まとめ （ 分）	5 読み返しの印と書き直した生活文へ、本時の判断と理由、見直した箇所を記す。 【まとめ】「へ」は行く先を表しているの、音だけで字を決めない。 6 初めの答えとの違い、または理由を確認して残した点を振り返る。 〈予想される児童の反応〉 ・促音・拗音・助詞などの表記の読み返しを、別の場面でも意識して使いたい。	結論が教師の例と同じかだけで判定しない。口で言った言葉と、書いた言葉は同じ発音になりますかへの答えに、語句や事実を示した説明があるかを見る。課題が残る場合は、次の関連学習でも同じ観点で記録を集める。 ◎知①（語句や関係の説明）・態①（見直しの理由。単元を通した記録と合わせる）

板書の構造（縦書き・右から左へ）

縦書きで右から左へ構成する。右端に単元名と本時の問い。その左に、児童が最初に出した考えと比較する例を置く。中央には促音・拗音・助詞などの表記の読み返しを確かめる語句や関係を並べ、線や矢印で根拠と判断を結ぶ。左側に読み返しの印と書き直した生活文で残す項目と見直しの理由を置く。左端は本時に確かめたこととその後に使う場面の記録にする。教科書の台詞や文章はこの配布物へ複製しない。

つまづきやすい所と手当て

聞こえる音だけで助詞や小さい文字を書く姿には、音を区切る手拍子と文の中での役割の確認を分け、助詞は文で読み比べる。本人に読ませることと、考えを表すことを分け、読字に負担がある場合は教師の読み上げや拡大提示を使う。筆記に負担がある場合は口頭説明を教師が記録する。同じ目標のために表出の方法を選べるようにし、支援を受けたことを評価を下げる理由にしない。

プリントの案

考えと理由を残す学習カード

読み返しの印と書き直した生活文のために、対象の語句や資料・初めの判断・理由・交流後の修正を記す欄を置く。今回の中心の問い「口で言った言葉と、書いた言葉は同じ発音になりますか」を欄の上に書く。教科書の文章や挿絵を複製しない。

見直しの理由を記すカード

最初の記録と見直した記録を並べる。「へ」は行く先を表しているので、音だけで字を決めない」のように何を根拠に考えたかを、自分の言葉で書く。教師の見本の写しではなく、自分で検討した語句や理由を残す。

出典：教材名・月・配当時数：東京書籍 令和6年度版 国語 単元一覧（https://ten.tokyo-shoseki.co.jp/text/shou/kokugo/data/kokugo_tangen_1_202503.docx）／東京書籍 国語 年間指導計画の公式入口（<https://ten.tokyo-shoseki.co.jp/text/shou/kokugo/keikaku/>）／文部科学省 小学校学習指導要領解説 国語編（https://www.mext.go.jp/content/20220606-mxt_kyoiku02-100002607_002.pdf）／国立教育政策研究所 指導と評価の一体化 小学校国語（評価規準の形式）（https://www.nier.go.jp/kaihatsu/pdf/hyouka/r020326_pri_kokugo.pdf）
AIが作成した授業案です。授業での検証は未実施です。自校の教材・年間計画・学級の実態に合わせて確認してください。



Threads「三重でAI使うなら」(@mie_ai_katsuyo)
https://www.threads.com/@mie_ai_katsuyo

LINEオープンチャット
みえ先生ラボ

